

平成 25 年度 教職員の自己評価集計結果とその考察（2 学期分）

藤 幼稚園

A : よく出来ている、B : まあまあ出来ている、C : あまり出来ていない、D : 出来ていない

上段の太い数字（2 学期）

下段の細い数字（1 学期）

I 保育の計画性

A 評価 B 評価 C 評価 D 評価

園の教育方針等の理解	園の教育方針や教育目標を理解する	0 % (0)	91 % (73)	9 % (27)	0 % (0)
教育課程の編成	園の教育課程を理解し、それに基づいて保育の計画を立てる	0 (0)	91 (73)	9 (27)	0 (0)
指導計画の作成	指導計画は幼児の発達に即して幼児期にふさわしい生活を展開できるように具体的に作成する	0 (0)	82 (91)	18 (9)	0 (0)
環境の構成	幼児が主体的に関わりたくなるような素材や遊具を考えて環境を構成する	18 (9)	64 (73)	18 (18)	0 (0)
	幼児が自ら活動を展開していけるような場や空間の構成をする	18 (0)	73 (73)	9 (27)	0 (0)
	楽しい雰囲気の中で安心して遊びこめる環境を構成する	36 (18)	55 (64)	9 (18)	0 (0)
	幼児の発達や生活を見通した環境の構成をする	37 (9)	36 (73)	27 (18)	0 (0)
評価・反省	自分の保育を評価・反省することで、次の保育に生かす	18 (9)	64 (64)	18 (27)	0 (0)

1 学期と 2 学期の自己評価を比較しながら考察する。

まず、「園の教育方針等の理解」の項目では、「まあまあ出来ている」（以下、「B 評価」という。）が 91%（18%増）、「教育課程の編成」の項目では、「B 評価」が 91%（18%増）となっている。また、「指導計画の作成」の項目では、「B 評価」が 82%（9%減）であるものの、園の教育方針や教育目標を理解した上での指導計画の立案は、概ね定着していると思われる。

また、「環境の構成」の項目では、幼児の主体性や発達を考慮して保育環境を構成していると自己評価した者は、「A 評価」と「B 評価」合わせて平均 84%（前回 80%）であり、前学期同様に保育環境の充実を図ってきたことが窺える。

「評価・反省」の項目では、「A 評価」と「B 評価」を合わせて 82%（9%増）であり、自己の保育を見直すことで次の保育に生かそうとしている者が若干増えてきたことが窺える。

II 保育のあり方、幼児への対応について

健康と安全への配慮	園内に危険な個所がないか、危険な遊び方はしていないか常に配慮し、危険が予測される時は安全な遊び方について幼児と一緒に考える	46 % (36)	45 % (55)	9 % (9)	0 % (0)
	園内の清掃や整理整頓、換気、採光、室温などに気を配る	36 (36)	64 (64)	0 (0)	0 (0)
幼児理解	個々の幼児の発達の姿や課題について、見通しをもって理解する	18 (9)	73 (82)	9 (9)	0 (0)
	幼児同士の関わりの姿を捉え、そこでの幼児の育ちを理解する	0 (0)	91 (82)	9 (18)	0 (0)
	幼児の理解のために家庭との連携をとる	18 (9)	64 (82)	18 (0)	0 (9)
指導との関わり	幼児の思いや考えに共感しながら、幼児と一緒に活動する	18 (0)	73 (91)	9 (9)	0 (0)
	幼児の話をよく聞いたり、スキンシップをとるようにする	36 (36)	64 (64)	0 (0)	0 (0)
	幼児が自ら考えたり工夫したりできるように見守り、行き詰まっているときには適切な援助をする	27 (18)	64 (55)	9 (27)	0 (0)
	幼児同士のトラブルに対し、適切な対応をするように心がける	18 (18)	82 (64)	0 (18)	0 (0)
保育者同士の協力・連携	クラスに関係なく、その場にいた保育者が適切な言葉かけや対応をするように心がける	18 (18)	64 (73)	18 (9)	0 (0)
	幼児のことについて保育者同士で話し合い、共通理解を図る	46 (27)	54 (73)	0 (0)	0 (0)

「健康と安全への配慮」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて平均96%（前回同様）であり、「健康と安全への取組」は教職員に浸透している。また、「幼児理解」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて平均88%（前回同様）であり、教職員は幼児理解に努力していると思われる。

また、「指導との関わり」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて平均96%（9%増）であり、教職員は幼児への関わりを重視しながら保育に当たっていることが窺える。

「保育者同士の協力・連携」の項目では、「クラスに関係なく、その場にいた保育者が適切な言葉かけや対応をするように心がけているか」の問いに「A評価」と「B評価」合わせて82%（前回91%）であり、前回より比率が落ちているものの、全園児を大切にしながら保育に当たるよう努力していることは窺える。また、「幼児について保育者同士で話し合い、共通理解を図っているか」の問いには「A評価」が46%（19%増）、「B評価」が54%（19%減）であり、協力・連携体制は定着してきていると思われる。

Ⅲ 保護者への対応について

情報の発信と受信	保護者からの相談や要望には心を開いて、よく話を聞くように心がける	27 % (27)	64 % (64)	9 % (9)	0 % (0)
対応上の心がまえ	保護者からの依頼や伝言などについては、メモをするなどきちんと対応する	27 (36)	64 (64)	9 (0)	0 (0)
クレームへの処理の仕方	クレームの内容によっては教職員全体で検討し、共通理解の上で対処する	18 (27)	73 (64)	9 (9)	0 (0)

「情報の発信と受信」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて91%（前回同様）を占め、殆どの教職員が、保護者からの相談や要望には心を開いてよく話を聞くよう心がけている。また、「対応上の心がまえ」の項目では、「A評価」と「B評価」を合わせて91%（前回100%）であり、前回より9%程減少しているものの、保護者からの依頼や伝言にはきちんと対応するように心がけていることは窺える。

さらに「クレームへの処理の仕方」の項目では、「A評価」と「B評価」合わせて91%（前回同様）であり、教職員は、概ねクレームの内容によって教職員全体で検討し、共通理解した上で対処していると思われる。

Ⅳ 地域や自然や社会との関わり

地域・自然・人々との関わり	地域の自然や主な施設の場所、交通機関、行事などについて理解するよう努める	0 % (0)	27 % (18)	64 % (64)	9 % (18)
小学校との連携	地域の小学校の行事や公開授業に参加するよう努める	0 (0)	28 (18)	27 (27)	45 (55)
子育て支援と地域への開放	子育ての支援や地域への開放に努めている	19 (18)	27 (37)	27 (9)	27 (36)

「地域・自然・人々との関わり」の項目では、「B評価」が27%（9%増）ではあるが、「あまり出来ていない」（以下、「C評価」という。）と「出来ていない」（以下、「D評価」という。）と答えた者は合わせて73%（前回82%）あり、改善できていない。また、「小学校との連携」の項目では、「B評価」とした者は28%（10%増）と依然として低く、逆に「C評価」、「D評価」と答えた者は合わせて72%（前回82%）あり、小学校との連携は課題として残っている。

「子育て支援と地域への開放」の項目では、「A評価」と「B評価」合わせて46%（前回同様）であり、逆に「C評価」、「D評価」と答えた者は合わせて54%（前回45%）を占める。こうした結果の要因として考えられるのは、園開放の担当者が固定化しており、担当者として評価の捉え方に差があるからではないかと思われる。ただ、「園開放」については、これまで年数回であったのを本年度より月1回程度実施したことで、参加者から好評を得ている。

また、同様に、「小学校との連携」についても、連携に関わる年長児担当者とそうでない者の意識の差が、こうした評価に表れているのではないかと考える。

V 研修と研究について

研修・研究への 意欲・態度	研修会や研究会には自己の課題をもって参加する	9 % (0)	73 % (73)	9 % (27)	9 % (0)
	自分の保育のあり方や悩みについて、他の保育者や主任、園長に相談する	18 (27)	55 (55)	27 (18)	0 (0)
今日的課題に関 する研修・研究 (複数回答可)	障がいのある幼児の理解と対応について研修する	18 (27)	37 (19)	27 (27)	18 (27)
	預かり保育や子育ての支援について研修する	18 (9)	19 (9)	36 (37)	27 (45)
	幼小連携の必要性や具体策について研修する	0 (0)	28 (28)	45 (36)	27 (36)
	危機管理の必要性と対応について研修する	9 (9)	46 (46)	36 (45)	9 (0)

「研修・研究への意欲・態度」の項目では、「研修会や研究会には自己の課題をもって参加しているか」の問いに「A評価」と「B評価」した者が82%（9%増）あり、また、「自分の保育のあり方や悩みについて、他の保育者や主任、園長に相談しているか」の問いには「A評価」と「B評価」と答えた者は合わせて73%（前回82%）と前回より9%程減少しているものの、概ね職場内で相談できる雰囲気は醸成されているものと思われる。ただ、研修会や研究会への機会の設定、教職員間の相談体制の充実については、引き続き努めていきたい。

また、「今日的課題に関する研修・研究」の項目では、前学期同様、十分でないと感じている者が多く、引き続き、本園の大きな課題として取り組んでいく必要がある。

その中で、Ⅳの「地域や自然や社会との関わり」の項でも既述したように、「園庭開放」については、これまで年数回であったのを本年度より月1回程度実施し、参加者から好評を得ている状況にあるものの、園庭開放の担当者が固定しているため、担当者とならない者とで評価の捉え方に差があることから、今回のような自己評価結果に繋がっているのではないかと考える。また、「小学校との連携」についても同様なことが考えられる。

さらに、特別支援教育に関わる研修では、津市や亀山市の教育関係部署と連携を図りつつ、不定期ではあるが、本園において教育相談に当たってもらっており、今後もこうした取組は継続していきたい。